雲州平田船川運河における掛出の空間構成

内田文雄（感性デザイン工学専攻） 安部悠（感性デザイン工学専攻）
伊藤健太郎（感性デザイン工学専攻）

A research on the constitution of the “kakedashi” space in Unshuhiratafunagawa.

Haruka ABE(Graduate Student, Graduate School of Sciences and Engineering)
Kentaro Ito(Graduate Student, Graduate School of Sciences and Engineering)
Fumio UCHIDA(Professor, Graduate School of Sciences and Engineering)

The cotton highway located in along cloud Shuhei rice field Funagawa is the area which prospered as a distribution center of the cotton which used the waterborne traffic of the Shinji lake and the Hirata Funakawa canal once. In recent years, waterside space, such as Kakedashi and an alley, is improved and the opportunity of city planning activities has been rising. A main subject aims at the waterside in a cloud Shuhei rice field Funagawa canal, the space composition of Kakedashi which is a point of contact of a life, and clarifying the change of how with a river to be concerned.

***Key Words**: Kakedashi, Shoji, Usuniwa, Waterside space,Unshuhiratafunagawa*

1. 序論

雲州平田船川沿いに位置する木綿街道は、かつて宍道湖と平田船川運河の水上交通を利用した木綿の集散地として栄えた地域である。近年、船川沿いに残る掛出や小路などの水辺空間が見直され、まちづくり活動の機運が盛り上がってきている。

河川沿いの集落に関しては、水辺と生活空間の関係について特徴ある地域を対象に多くの研究が行なわれている。既往研究には、河川との関わりから集落空間の構成を明らかにした研究[1)]や、水辺と居住空間の関係性の分析[2)]などがある。また木綿街道と同様に水運を利用した生業で栄えた集落に関しては、土地条件や集落の空間構成の分析[3)～6)]などがある。しかし、山陰地方における研究事例は少ない。

本研究は、雲州平田船川運河における水辺と生活の接点である掛出の空間構成と、川との関わり方の変容を明らかにすることを目的とする。

2. 調査の対象と方法

2.1 対象地域の歴史地図

江戸時代、「雲州平田木綿」は大阪市場にまで流通するほどの、この地を代表する一大産業であった。宝暦 14 年の記録が灘分地域の綿作が多くなってきたことを記しており、享保 8 年の川違後、旧河道跡地が綿作地になり、木綿生産の原料が供給されたことにより農村手工業が活発化したと考えられる。また、寛政 4 年の平田町の店舗構成をみると、紺屋 11 軒とある[7)]。これは木綿生産を反映した職業であり、木綿産業の市場町として栄えたことがわかる。

Figure 1 調査対象集落の位置図

Table 1 調査内容一覧表

調査項目	方法	内容	調査期間
掛出1と油屋小路 掛出2と岡屋小路 掛出3と出しの小路	実測調査 ヒアリング調査	・共有の掛出と小路の関係 ・掛出と水辺、小路と家屋の境界 ・掛出と小路の使われ方	第1回：2012.8.16～24 第2回：2012.9.18～25 第3回：2012.11.26～12.4
掛出4（佐々木邸） 掛出5（酒持田本店） 掛出6とうす庭（小村邸）		・私用の掛出と家屋の関係 ・掛出と水辺の境界 ・掛出の使われ方、生業と生活空間の変容	

しかし、機械化の進行により明治末期には綿業が衰退し、その後製糸業が発達し、県下第一の工業都市となった。また、昭和に入っても、舟運では変わらず穀物類や塩を運んでおり、醸造業が続いていた。現在も木綿街道では 4 軒の醸造業が営まれている。

近世に入り、江戸時代から明治の鉄道開通までの宍道湖水運繁栄期において、江戸時代に急速に形成されてきた斐伊川の沖積地を後背地に控え、船川運河によって宍道湖につながり、商業町として栄えた。また、日本海方面についてみても、寛文年間に西回り航路が開けてから、物資の全国的流通がこれによって促進された。

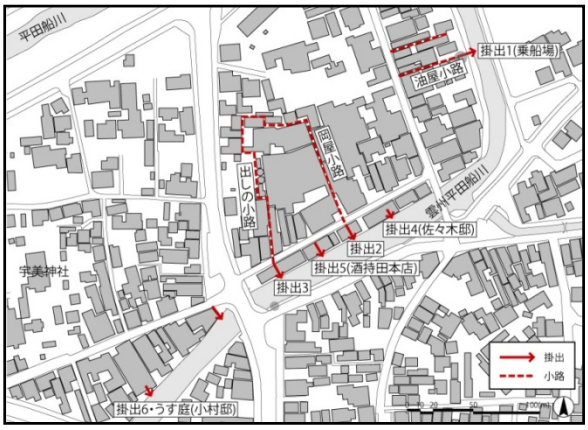

Figure 2　調査対象

2.2 調査概要

本研究は、島根県出雲市平田町（Figure 1）にある新町、片原町、宮ノ町からなる、「木綿街道」と呼ばれる地域を対象とする。木綿街道沿いに流れる雲州平田船川では、川に突き出す掛出が水辺との接点となり物資の運搬が盛んに行われ、木綿を中心とした生業が発展した。しかし、機械化による木綿産業の衰退、道路交通発達による水上交通の衰退などの理由により集落の存立基盤は変化してしまった。

本研究の調査概要を Table 1 に示す。研究方法としては、文献調査、ヒアリング調査、実測調査を用いる。文献調査により交通や、生業と暮らしの変容を明らかにし、ヒアリング調査・実測調査により水辺との接点である掛出空間を明らかにする。特に実測調査においては、掛出 6 事例と小路 3 事例、うす庭をもつ商家 1 事例を対象とし、掛出とそれに付随する空間構成を把握する。

3. 掛出の空間構成

水運で栄えたこの地域では、水辺との接点となる空間が数多く存在する。かつて川沿いには、いくつもの船着場があり、穀物類や塩などの荷物を上げ下ろししていた。現在はその名残として、護岸には川に降りる階段などが残っており、その階段を下りた先に掛出と呼ばれる空間がある。

掛出とは、川に突き出した小さな桟橋のことを指

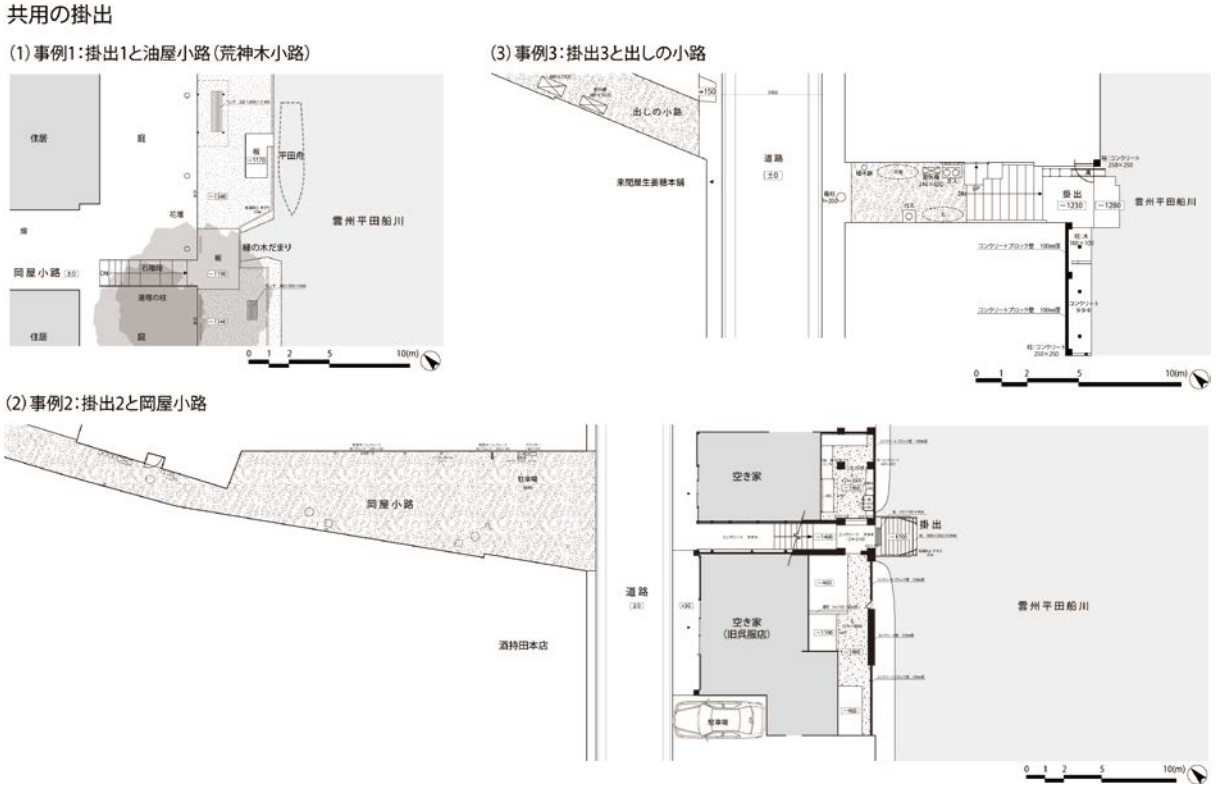

Figure 3　共用の掛出　平面図

す。『広辞苑』では「建物の一部を突き出して造ること、またその部分」とあるが、この地方の方言、出雲弁ではそれ以外に、「川や池につくった洗い場」という意味も持つ。掛出は荷物の上げ下ろしや洗い物に利用され、人々の生活の中心であった。

4.1　共用の掛出（Figure 2 - 掛出 1・2・3）

現在、木綿街道に残る共用の掛出は、小路とつながっているものが多い。

小路とは、建物の脇を通り、奥の蔵や民家に入るための路地のことを指す。小路と掛出によって、川と蔵をつなぎ、荷物の運搬などに利用していた。小路の奥には大店が所有する長屋造りの借家が存在し、小路の呼称には大店の屋号が使われていた。

(1) 事例 1：掛出 1 と油屋小路（荒神木小路）

江戸時代、小路の向かいに製油業を営む油屋があった。油屋小路は油屋専用の小路として菜種などが荷揚げされていた。

油屋小路を入ると奥の掛け出しの脇にエノキとタブが絡み合った巨木がある。エノキは一里塚、タブは荒神信仰の木として祀られている。かつて宍道湖湖岸でもあったこの場所は、雲州平田港の目印となっていた。現在は、縁の木だまりという名称で平田舟の乗船場として利用されている。

(2) 事例 2：掛出 2 と岡屋小路

掛出 2 は、家屋の 1 階を一部くりぬくようにして掛出へ降りる階段がつくられている。これにより掛出と小路はつながり、共用の掛出として利用されていた。また、階段を下りると、両脇には物置や洗い場といった空間がある。

また、岡屋小路の近くにはかつて岡屋と称する木綿問屋があり、掛出とつながることで小路の奥にある岡屋の蔵から綿花や平田木綿（白木綿）などの荷物を船に積み込み、また船からの物資を蔵に運び込むために使用されていた。しかし、明治 10 年の大火により、小路に面して建ち並ぶおよそ 20 軒もの借家を含め消滅してしまった。その後も小路の奥に鮮魚店など商店が営まれ、生活通路としてもなくてはならない存在であった。

(3) 事例 3：掛出 3 と出しの小路

掛出 3 とつながる、酒持田本店と来間生姜糖本舗の間を抜ける出しの小路の奥にはかつて寺院が存在したといわれ、現在も荒神が祀られている。

また、酒持田本店の工場の周りを回っていくと、岡屋小路に抜けることができ、小路の奥に住む住民は外出先の方向に応じてこの小路を使い分けている。また、小路の奥の住居に対するヒアリング調査により、昭和初期、洗い場としてこの掛出を使っていたということが確認できた。

Photo 1　掛出 1 と油屋小路（荒神木小路）

Photo 2　掛出 2 と岡屋小路

Photo 3　掛出 3 と出しの小路

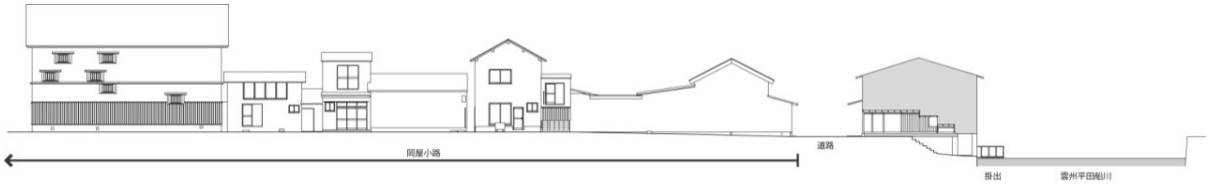

Figure 4　掛出 2 と岡屋小路の断面的関係

Figure 5　私用の掛出　平面図

4.2　私用の掛出（Figure 2 - 掛出 4・5・6）

かつて川沿いに建つ家屋の多くには私用の掛出があった。主に商家に多く、荷物の上げ下ろしや洗い物に利用された。しかし、川の増水時に浸水するなど、維持管理が大変であるため、現在は埋め立てる家屋が多く、掛出の数は減少している。

(1) 事例 4：掛出 4（佐々木邸）

佐々木邸は、家の中から降りた所に掛出がある現在の木綿街道では珍しい私有の掛出をもつ家屋である。台所から外履きに履き替えて、階段を下に降りるとコンクリートの土間空間があり、そこは浴室・洗濯・物置として利用されていた。手押しポンプが設けられており川からの水を汲み上げることもできる。また、外に出ると掛出があり、洗い場や物干場として現在も使われている。しかし、夏場などは船川の増水により土間空間まで川の水が浸水したり、藻が繁殖したりするため、清掃などの維持管理が困難であるという問題がある。

(2) 事例 5：掛出 5（酒持田本店）

古くから造り酒屋を営む酒持田本店の向かいにある掛出 5 は、酒の原料である米などを運ぶためにつくられた私有の掛出である。掛出 2 と同様に建物をくり抜くようにして掛出への階段が下りているが、入口には扉が備え付けられており、両脇は酒持田本店の倉庫などとして利用されている。

(3) 事例 6：掛出 6 とうす庭（小村邸）

かつてこの地域の町屋では、主屋の表側を見世とし、裏側を掛出として船川から荷揚げをして商売を営んでおり、屋敷内には見世と掛出をつなぐうす庭と呼ばれる土間空間が設けられている。Figure 6 は、明治以前の染物屋、明治以降の塩問屋を営んでいた頃の平面図である。掛出から上げた荷物は、一度蔵に保管し、うす庭を通って見世に出されていた。生業や生活の変化に伴い間取りは変化し、掛出と見世の関係は薄れてしまった。

Photo 5　掛出 5（酒持田本店）

Photo 4　掛出 4（佐々木邸）

Photo 6　掛出 6 とうす庭（小村邸）

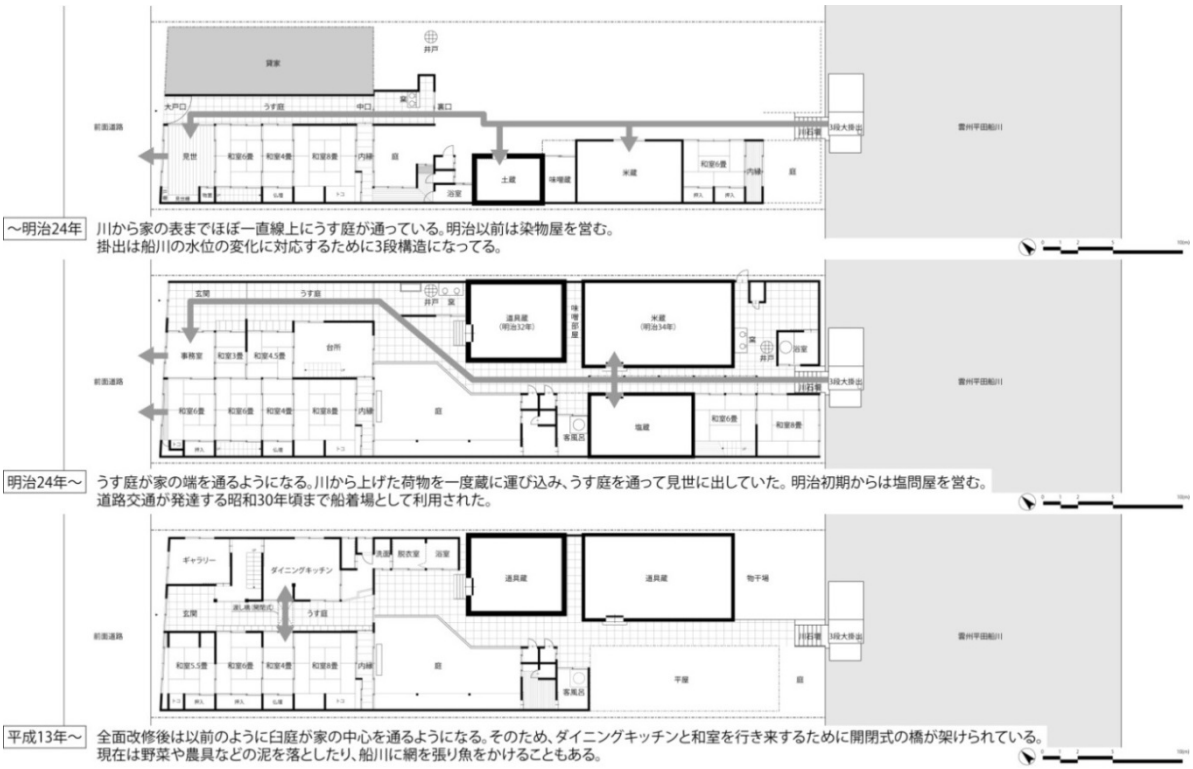

Figure 6　掛出 6 とうす庭（小村邸）　商家における川と生業の平面的関係とその変遷

5.　結論

本論では、平田町の木綿街道を事例として、雲州平田船川運河における掛出の空間構成について分析を行った。得られた知見は以下のとおりである。

1) 掛出は、物資の運搬における船着場として機能し、上下水道が整備されていない時代には日常生活における洗い場として機能した。
2) 掛出は、小路やうす庭などとつながり、川に対して垂直方向に動線を設けたことで、まち全体における水辺との関係が維持されていた。
3) 共有・私有の掛出は、用途に合わせ水辺と暮らしの接点となり人々の生業と生活を支えてきた。
4) 掛出には物置や作業場、洗い場、浴室といった空間が付随して、生活の利便性を支えた。
5) 商家は、生業の変容に伴い、住まいとしての空間につくりかえられるようになった。

以上より、木綿街道における「自然環境・暮らし・空間」の 3 要素が一体となり固有の関係をもつことによって、水運により栄える市場町の集落空間を構成してきた。特に、掛出や小路、うす庭が水辺との関係をつくり、集落空間・生活空間を形成してきた。これらはこの土地独自の形態と秩序を集落空間に与え、水辺空間を形成していることが明らかになった 。

謝辞

本研究を進める上では、木綿街道振興会の方々の研究課題及び調査計画に対する御理解･協力と、住民の方々の実測調査、ヒアリング調査への多大な協力を頂いた。末尾ながら記して深謝の意を表します。

参考文献

1) 阿賀中流域「当麻」集落における川辺空間の所有と利用：河川との関わりから見た集落空間の構成に関する研究／黒野弘靖、川口薫、徳江威彦、伊藤隆弘、星名康弘
2) 水郷柳川における屋敷と水路の相互関係とその変容／丸茂悠、菊地成朋
3) 河川流域に形成された近世集落の空間構成に関する研究：岩木川の五所川原について／相模哲雄、飯淵康一、永井康雄
4) 河川流域に形成された近世集落の空間構成に関する研究：岩木川の板屋野木村について／相模哲雄、飯淵康一、永井康雄
5) 河川流域に形成された近世の集落における空間構成に関する研究：江合川の福沼村長瀬集落について／相模哲雄、飯淵康一、永井康雄
6) 河川流域に形成された近世の集落における空間構成に関する研究：北上川の本鹿又町集落について／相模哲雄、飯淵康一、永井康雄
7) 『平田市誌』平田市誌編纂委員会、平田市教育委員会、1970

（平成 26 年 2 月 12 日受理）